

槐

かい

岡井省二創刊

平成23年11月号

平成二十三年十一月一日発行 第二十一巻第十一号 通巻第二四五号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



言 霊

高橋将夫

竹を伐る初めの音のよく響く

落ち鯛の夢外海にありにけり

落ち鮎のまだ寄るところあるらしき

胎蔵界見てきた顔のちちろ虫

光背の後ろの闇のちちろ虫
双子ゐて蠅螂つまむ方が兄
宇宙への第一歩なり登高す
億光年前の銀河を頭上にす
人類の未来は秋の空の色
万丈の山も気化して霧となるか
浮かんでは消ゆる言霊秋の雲

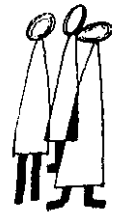
槐安集

水野恒彦

野分して禱るかたちの葡萄の木
たましひほどの重さに桃冷えし
流氓のごとく花野をさ迷へる
星までの太虚なる距離魂まつり
芒原に水葬のごと沈みけり

延広禎一

槐安集 三十四年記念号
紹袴や万歳楽の翁眉
『原安子句集』(春風)
遺句集を啣へ大瑠璃天空へ
なにはさて鱧のざくざくありてこそ
閻王の舌縫れたる炎暑かな
遊行期の真瓜まっかを齧る親父の地



加藤みき

ほとぼりの鎮まりし浜晩夏光
実の上にちよこんと残る草の花
ゆつくりと案山子の着物見てあるく
筋雲やありなしの揺れえのころに
万燈会狸の燈も混じりあり

石脇みはる

鶏頭やものには順序ありぬべし
鯖鮎の一閃に艶ありにけり
流星や未来の幸を祈りたる
向日葵や主義も主張ももちぬたる
どこまでも伸びゆく秋の野道かな

中島陽華

瓢生るひとり笑ひをしてゐたり
すはま菓子子が食してをり秋の川
子ら旅へ足指開くあおば木菟
のし烏賊の束炎天の追分に
発心や隠元の花天空を

栗栖恵通子

曼陀羅に紛れこんだる残暑かな
銀漢や風信帖を巻きもどす
山裾の灯はじめや夜の秋
秋潮の押し戻してはデスマスク
飛白体二、三步退る秋の滝

竹内悦子

雲の峰心踊らすことのあり
次々と来て尻をふる油蟬
炎昼や一途にのびる飛行雲
庖丁の音の消えたる鱧の皮
藪からし夜の中着袋かな

大島翠木

脚四本つけても空し茄子の馬
かはたれの迎火の灰まるびくる
山沿ひを狐雨行く切子かな
寒蟬や大正ふかい水の底
木刀振るマーラーの秋冷の大地に

雨村敏子

今朝秋の葉蘭の繁み濡れてをり
宇佐神宮に錫杖響む盆の潮
火と水と蟬のいのちの太初より
一頭の夏蝶が目に伊勢の海
白桃のひとつの疵を慈しむ

本多俊子

竹の春何も忘れて佇ちてをり
秋の庭一隅に身を潜めをり
影長く巫女は桃の実供ふなり
秋の山遠き川瀬の音籠る
よろこびもかなしみもなく秋の雲

小形さとる

いちはずや寺に縁ゆかりの昼の月
峰ねぐも雲立つ広目天の毗に
夏を愛す房中術もことのほか
残飯とカラスと八月十五日
空蟬やかかのむくつけき輩も

近藤きくえ

沖の船動くともなく動く朱夏
もの大山崎のふのこゑありにけりひつじ草
唇を舐めつつ炎暑云ひにけり
烏瓜咲き星空にとけ入りし
篝火消えさみだれ音を残すのみ

近藤喜子

銀漢や祈るころの古代より
稲光^{大山崎}せつな少女の白髪に
一日のすぐ遠くなる花野かな
藍ふかき空えいえいと槍鶏頭
露の世や信じ続けるものあり

谷村幸子

摘みきたる野の花壺に今朝の秋
葉月潮にわとり小屋のしめりをり
晒す書が風に繰られてナポリかな
二人してつまんでゐたる一位の実
青栗やしづかなる日の警察署

瀬川公馨

国歌斉唱ルチアポップが月の客
いちぢくの生れたばかりの双生児
涼風のひゆるひゆる吐くや森の腸
がやがやと百家争鳴夏蓬
駒繫誰も嫁にはこずじまひ

久保東海司

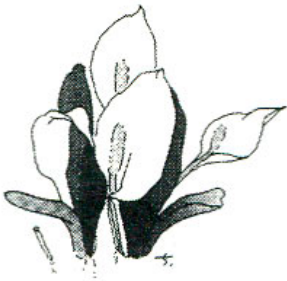
海女浮いて祈りを捧ぐ終戦日
嘘をつく口で鬼灯鳴らしをる
現し世の音は聴こえず滝の前
古団扇妻の不機嫌音にあり
開き切る迄のときめき水中花

西村純太

折鶴の漂ふ灯籠流しかな
残照の礫像昏き玻璃の色
光陰の鎮もりぬたる花野かな
乾坤に生きて蠓螂夫を食む
蘇るために死にゆく秋の蝶

中野京子

とまと挽ぐ今があるからここがいい
爪切つて髪切つて蜥蜴の尾
さざ波の素足に運ぶ夕日かな
遠き風近き風あり走馬燈
三十余年経たる梅干はんなりと



槐市集

岩下芳子

天の川溢ることのなかりけり
守口の江戸川乱歩夏瘦せず
ぶんぶんのひつくり返り二三日
落し文暗峠にいのちあり
八月の宮の大楠語りたる

岩月優美子

秋暑し過客は言葉少なかり
八月の靈魂秘めし太き樟
秋蟬の棲みついてゐる耳の底
新涼や分厚き父の英和辞書
秋夕焼ムンクの叫び永久にあり

江島照美

紅蓮に紅蓮地獄といふ言葉
風鈴も人も音色も取り取りに
生ビール並べて父の上機嫌
大橋の下に群青夏の潮
雨樋を締めつつ上る灸花

金澤明子

三代と米寿の膳や梅雨晴るる
炎天を巡る健脚親ゆずり
踊り子草袂かさねて持ちにけり
沙羅双樹茶席の客の座にじり口
夏蒲団引き寄せ嫁して七十年



槐集

高橋将夫選

ヘルメスの杖に登りし穴惑 守口 柳川 晋

1も2も0も等しく大花野

風の色木の色火色水の色

芒原入り口のなき迷路かな

精霊と踊りて人に返りける

眠る子の花火の匂ひしてゐたり

名水に涼しき舌のありにけり

からすみや気紛れ漢通りける

指笛や苦瓜多き年なりき

巡りくる月に世界の事問うて

きまじめな仮面外して踊りけり

星飛んで吾が魂に迫るもの

前向きの一生かまつか燃えにけり

天の川シンセイザイザ響みたり

仮の世の快樂いつまで秋蛩

岡崎 岩月優美子

摂津 中田 禎子

仕舞湯に鞍馬一節葛嵐 京都 竹中 一花

捨案山子顔一杯の笑ひかな

天網をすり抜けて来し秋の風

秋蟬の声の高さよ淋しさよ

考の家を風の訪ひをり枳殻の実

恐ろしき迄に静かや蟻地獄 枚方 熊川 暁子

月下美人余命は闇に返しけり

神ある日茄子に甘味を添へ給ふ

穂孕みの田の色重く香を放つ

鳴きつくしたる命一つや晩夏光

蟪蛄の相食むことの慣ひかな 守口 岩下 芳子

適塾のはだか電球良夜かな

鬼一匹と駆け回りたる花野かな

すらすらと読めぬ文集星月夜

処暑の晨ラジオ放送師の一句

銀河往来

高橋将夫

◇「槐集」 観照

ヘルメスの杖に登りし穴惑 柳川 晋
冬眠のために穴に入る蛇がまだ穴に入らずに徘徊している。その穴惑が杖に登ったという。ヘルメスの杖は実は穴惑だという発想に驚かされた。

ヘルメスはギリシャ神話の神。幸運福裕の神、旅人の守護神。靈魂を冥界に導く役目を持っていた。ヘルメスは二匹の蛇がからまっている杖を持って、冥界・地上界・天界を往復し、神々の相互の意思や命令を伝える伝令の役目を果たした。

へ1も2も0も等しく大花野 晋 は槐衆でないとは分らないかもしれない。先師岡井省二先生の句集『大日』の第一章のタイトルは「〇―1―2」だった。「色即是空」と「一切即一切」の数式化である。華嚴・密教的宇宙観、世界観即花野ということである。

眠る子の花火の匂ひしてゐたり 中田 禎子
子供が遊び疲れたのかぐっすり眠っている。庭で火花火でもしていたのか、花火の匂いがするようだという。ほほえましい景である。

きまじめな仮面外して踊りけり 岩月優美子
普段見たこともない顔つきで踊っているという。踊りに熱中している様子がよく伝わってくる。

捨案山子 顔一杯の笑ひかな 竹中 一花
顔一杯に「へのへのもへじ」でも書かれているのだろう。役目を終えて捨てられたのを知ってか知らずか、案山子は何も言わずに笑っている。

恐ろしき迄に静かや蟻地獄 熊川 昶子
蟻地獄といっても特段のことはなく、静かな時間が過ぎていく。それがかえって凄みを感じさせる。

鬼一匹と駆け回りたる花野かな 岩下 芳子
子供と花野で鬼ごっこでもしているのだろうか。いやいや、本当の鬼と駆け回っているのかもしれない。それにしても、この頃は野山に鬼も天狗も河童もいなくなってしまった。

酒少し嗜んでゐる迎へ盆 十川たかし
ご先祖を迎えるのに酒とは不謹慎などというのは野暮。その方がご先祖も気兼ねなく帰ってこれるといふもの。

月光に吸はれさうなる女かな 犬塚 芳子
月光を浴びて佇む女性。まるで月に吸い込まれそうに見えるという。月光と女性の妖しい雰囲気かたじよう。

水澄むや磧の石は貌を持ち 吉田 順子
秋の澄んだ水が流れる石の川原の景。石それぞれに顔があるという。澄みわたった目で見るとそう見えるのだ。

牛馬の優先とある薄みち 松下八重美
放牧場の近くの薄原であろうか。歩行者優先でなくて牛馬の優先であるところがなんとユーモラス。(以下略)